

はじまる頃には終わってしまう —プロゼミⅡに立ちはだかる壁—

文学部人文学科助教

酒井 智宏

1. 本論の目的

プロゼミⅡの授業運営は難しいと言われることがある。この論文では、その難しさをなるべく分かりやすく描き出してみたい。

2. プロゼミを学ぶ？

プロゼミの長大なシラバスを思いきり要約するならば、プロゼミとは「研究成果を論文にまとめることを学ぶ」授業ということに尽きるだろう。このうち「研究」の中身については 2 年次以降に本格的に学ぶものであり、プロゼミの段階では、学問分野を問わない最大公約数的な論文作成技術を身につけることが求められる。

ここで最初の障壁が立ちはだかる。日本文学の授業とは日本文学についての授業である。いきなり何を当たり前のことと言ひだすんだと思われるかもしれないが、プロゼミの場合にはこれが当たり前ではない。「日本文学の授業とは日本文学についての授業である」がほとんど同語反復であるのに対して、「プロゼミの授業とは論文作成についての授業である」は同語反復には見えない。日本文学の授業には日本文学を学びたい（ということになっている）学生が来るだろうが、プロゼミの授業に来るのはプロゼミを学びたい学生ではない。「プロゼミを学ぶ」という表現は、教員にとってさえ意味不明である。そこで、プロゼミの初回は、「何の授業かは知りませんが、必修だから仕方なく来たんです」といった面持ちですわっている学生たちに、「この授業では論文を書く技術を学びます」などと説明することになる。この点に関しては、プロゼミⅠもプロゼミⅡも大きく変わることはない。

3. まずテーマを決める・・・いや決まらない

素朴に考えるならば、論文執筆の出発点は「テーマを決める」ことだろう。「プロゼミを決して『学部学科専門の基礎的授業』と扱ってはならない』『教職員便覧』(平成 24 年度版: 163) という理念に照らすならば、「テーマは自由」とするのがもっとも簡単である。だが、この簡単さがたちに第二の障壁に変容する。一般に、「A とは B である」という定義文において、A には未知の表現が、B には既知の表現が来る。ところが、「プロゼミとは論文作成についての授業である」において、学生は「プロゼミ」だけでなく「論文」の何たるかも知らない。大半の（もしかするとすべての）学生が大学に入るまで厳密な意味での論文というものを書いたことがなく、おそらく見たこともない。それだけならまだよい。問題は、論文でないものを論文だと思い込んでいることである。春学期のプロゼミⅠを通じて正しい認識に到達する学生もいるが、そうでない学生もいる。油断していると、たとえば「いじめについて」といったテーマが出てきて、次のような「論文」ができあがる可能性がある。

「最近いじめで自殺する人が増えている。私も小学校の頃いじめられていたので、他人事とは思えない。だからいじめについて書いてみようと思った。 [...] いじめられた人はとても悲しい思いをする。いじめはよくないことだ。他人を思いやる心をもって全員がこの問題に向き合えばいじめはなくなると思う。 [...] 私はいじめられて悲しかったので、いじめる側にはなりたくない。これからもこの気持ちを忘れずに生きてていきたい。」(本論文の筆者による創作)

ここでは、レストランのメニューからコース料理を選ぶような感覚でテーマ選びが行われている。「いじめ」「戦争」「正しい日本語」などといったコースがあり、「いじめ」や「戦争」を選べば「なくそう」という主張が、「正しい日本語」を選べば「守ろう」という主張がセットでついてくる。いわば論文執筆が択一問題に堕しているのである。それゆえ、テーマを決める前に、「何よりもまず論文教育において求められるものは、論文でないものしか書いてこなかった人たちを、論文を書くことへとガイドすることなのである。」(野矢 2006 : 163-164)

4. 批判へのまなざしと批判への嫌悪

上の「いじめ作文」が論文でないのはなぜか。「 [...] 論文を書くことについて何か誤解ないし無理解があるのではないだろうか。『小論文とは、あるテーマについて、自分の考えを、あるまとまりをもった明快な叙述で表現することである』と。だが、これは相変わらず『たんなる作文』教育の発想でしかない。」(野矢 2006 : 163) 論文には批判へのまなざしがなければならない。論文とは、異なる意見をもつ他者に向けて書かれるものである。全員が同じ意見であれば、その意見をわざわざ表明する理由はない。それゆえ、論文の技術とはすなわち反論の技術にほかならない(香西 1995)。これに反して、「いじめ作文」は、「いじめはよいことだ」と言い出す他者がいないことを最初から見込んでおり、分かりきったことを唱えるだけの文章となっている。香西(1995: 31)はこの種の空疎な意見文を「悪質」とまで断じている。

辛辣さでは野矢(2006)も負けていない。赤本に掲載された小論文試験の模範解答を引用し、「まずなによりも、これがどういう意見の持ち主を読者として想定しているのか、そして相手に何を伝えたいのかが不明確である点が指摘できる。 [...] もっともなことを言っているという安心感が、緊張感のないだらしのない論述を生み出してしまっている。論証の前提としてであれば、誰もが認めるだろうことを確認しておく作業も必要なことである。しかし、誰もが認めることをとくに論証もなく結論として恥じないのは、まさに鈍感さ以外の何ものでもない」(同: 166)と一刀両断にする。

ところが、「いじめ作文」のような共感型の文章しか書いてこなかつた学生にとって、「論文の技術 = 反論の技術」という図式はただちに嫌悪の対象となる可能性がある。他者を批判し、言いくるめるとは何ごとか。自分はそんなものは書きたくない。ここで二つのことに留意する必要がある。第一に、たとえば剣道の授業が決して日常生活において棒で他者を殴ることを目的にしていないと同様に、プロゼミの授業は決して日常生活において他者を論駁することを目的にしてはいない。攻撃と防御のない剣道が剣道でないと同様に、攻撃と防御のない論文は論文ではなく、{剣道 / 論文}という競技に参加する以上、どうしても攻撃と防御を学ばなければならないのであ

る。第二に、論文は人を説得する技術のひとつにすぎないということである。「— [...] 他人に自分の考えを認めさせる手段は、論文を書くことだけじゃないよね。相手の恐怖心に訴えて脅迫してもいいし、情に訴えて泣き落としてもいい。相手の無知につけ込んでだますというやり方もある。一洗脳するってのもありますよね。一極端に言えばそうだな。でもね、人に恐れられたり、哀れまれたり、恨まれたりすることと引き替えに考えを伝えるのとは違った回路をもう一つくらいもっていたっていいだろう。相手の理性に訴えて説得するという回路をさ。」(戸田山 2012: 50-51) 論文の授業の目的は、決して学生を洗脳して「論文が書ける者 = 人生の勝者」という信念を植えつけることではないのである。

本論文において(そして私のプロゼミの授業において)参考文献からの引用が多用されるのには理由がある。多くの学生は論文を見たことも書いたこともないので、「論文の技術 = 反論の技術」という図式をそう簡単には信じない。そこで、複数の教科書が同じことを言っているという事実が決定的に重要になる。プロゼミは卒論へと向かう序章である(シラバス参照)。何としても学生を説得し、脱落者を出さないようにしなければならない。それゆえ、学生に恐れられたり、哀れまれたり、恨まれたりするのと引き替えに考えを伝えるのとは違った授業運営が求められる。

5. まずテーマを決める・・・いや主題と問題と主張を決め、論証構造を作る

授業の目的の説明のためにずいぶん時間を費やしてしまった。こんな授業は他にないだろう。さて、もうあまり紙面も残っていないが、目的が分かったところで、いよいよ内容に入ろう。

まず、「いじめについて」という主題だけでは論文を書き始めることはできない。論文には「主題(何について)」「問題(何が問われ)」「主張(どう答えるのか)」の三つが必要である(野矢 2006: 45)。

次に、「最近いじめで自殺する人が増えている」の「最近」とはいつで、この文の述べる事実を支える文献は何なのか。

それから、「私も小学校の頃いじめられていたので、他人事とは思えない。だからいじめについて書いてみたいと思った」「これからもこの気持ちを忘れずに生きていきたい」の部分についてだが、そういう個人的エピソードは論文に書いてはいけない(戸田山 2012: 43)。あなたがいじめを受けたことは、あなたがいじめはよくないことだと思うようになった原因・経緯ではあるだろうが、いじめがよくないことであることの根拠・理由にはならない。根拠・理由は主張を論理的に支えるものに限られる(同: 39)。

「他人を思いやる心をもって全員がこの問題に向き合えばいじめはなくなると思う」の部分についてだが、「この問題に向き合う」とは具体的に何をすることなのか。「こういう雰囲気だけで成り立っているような具体性の欠如した表現に対しては、具体例を求めることがポイントになる。」(野矢 2006: 148) その表現の意味が明らかになったとして、「他人を思いやる心をもって全員がこの問題に向き合う」ことは「いじめがなくなる」ことの十分条件なのか、それとも必要十分条件なのか。また、そこに隠れた前提はないか。そもそもこの仮説形成に至った推論は帰納なのか、演繹なのか、それらの組み合わせなのか。議論の筋道をはっきりさせるために論証図を書いてみよ

うか。論証図ができたらアブストラクトも書いてみよう。ああそうだ、まさかこの「全員」は「全人類」のつもりじゃないですよね。まさかね。

などなどと問いつめられれば、誰でも嫌になる。そこで、この段階では個人指導はせず、「これから教科書を軸にして論文の技術を学んでいきます。それをふまえながら、12 月までに自分の発表と小論文の主題・問題・主張を決め、論証図とアブストラクトを作成してください」と宿題を投げておくことになる。

6. おわりに、あるいははじめに

このやり方で全員が論文の技術を身につけられればよいが、そもそもいかない。12 月になって提出された主題・問題・主張・論証図・アブストラクトを見て、もう少し問題を絞ってみませんか、と言いたくなる頃には、春休みが目前に迫っている。1 月は行き、2 月は逃げる。今回はこれでいいですが、卒論ではもっと問題を絞ることを心がけてくださいね。ではよい春休みを・・・

論文の何たるかを理解しなければ、論文を書きはじめることができない。論文を書きはじめる頃には学期が終わる。概念理解と実践をいかにして同時並行的に行うか。プロゼミを担当するとは、そのための試行錯誤を続ける過程にほかならない。ここで、「とりあえず書かせてみる」は通用しない。それは「目的地が北海道だか沖縄だか知らないが、とりあえず出発させる」ということに等しい。とりあえず書かせて添削すればよいではないか。いや、無駄である。目的地が北海道であることさえ知らない学生を羽田空港あたりまで案内し、「あとは自分でがんばって」と言ったところで、学生はなぜ自分が羽田空港に連れて来られたのかさえ理解しないだろう。羽田空港に向かう前に、学生とともに地図を広げ、学生とともに現在地と目的地と旅程を確認しなければならなかつたのである。

念のため、試行錯誤がついに錯誤で終わり、旅の途中で幕が下りてしまったときのための切り札も用意されている。「今回はこれで時間切れになりましたが、教科書（野矢 2006 と戸田山 2012）は二冊とも処分せずに手元に置いておいてくださいね。卒論を書くときに必ずもう一度役に立ちますから。」いや、これは切り札というよりただの捨て札りふかもしれない。

参考文献

- 香西 秀信 (1995) 『反論の技術: その意義と訓練方法』 明治図書.
野矢 茂樹 (2006) 『新版 論理トレーニング』 産業図書.
戸田山 和久 (2012) 『新版 論文の教室: レポートから卒論まで』 NHK ブックス.